

入選

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験
「誰かのための自分の悩み」

福島県立郡山高等学校3年 七海翔斗

話したいのに声が出ない。望んでいないのに、言葉の最初の音を繰り返したり、伸ばしたりしてしまう。あなたはそんな経験をしたことがあるだろうか。「わ、わ、わたしはね」「わーっ、わたしはね」……わたしはね」といった話し方をする人があなたの周りにはいないだろうか。

これが吃音だ。この症状の名前は知らなかったが、実際に吃音に悩んでいる人と一度は出会ったことがある、という人は少なくないと思う。私は、保育園の頃から十五年近く、吃音と共に生きてきた。幼少期に吃音になるのは決して珍しいことではない。たくさんの人が吃音になるが、ほとんどの場合は小学校入学前には自然に治るそつだ。しかし、私の場合はそうともいかなかった。

保育園を卒園した私は、夢と希望に溢れながら、小学校の門をくぐった。しかし、私を待っていたのは、音読や発表という、吃音をもつ私にとって苦痛のような時間だった。もちろん、体育や友達と遊ぶ時間はとても楽しかった。ある時、授業の中で自己紹介をする機会があった。私の番になり、名前を言おうとした。だが、「僕の名前はの『ほ』が言えなかった。言葉が喉につつかえたように出てこなかった。すると周りからは、「自分の名前も分らないんだ!」と言われ、笑い声が教室に響き渡った。そんな経験を繰り返すうちに、それがトラウマになっていった。音読や発表の時間になると、鼓動が急激に早くなり、緊張や不安に押しつぶされる。また言えなかったら、どうしよう。そんな嫌なイメージが脳裏をよぎる。そして、結局言えずに、先生が次々、順番を飛ばす。いつしかこれが、私の当たり前であり、日常になってしまっていた。

時は流れ、私は中学生になり、そこで恩師と呼べる先生と運命的な出会いをした。その先生は、生徒と教師の距離が近く、まるで家のような

温かい雰囲気のカラスを作ってくれた。これまでに出会った、頭ごなしに怒る厳しい教師たちとは大違いだった。私はそこから、だんだんクラスの中で、本当の自分を表現できるようになっていった。自分に自信がつき、人前での恐怖心もなくなっていた。そんなときに、その先生が生徒会役員を勧めてくれたため、生徒会副会長になり、活動する中で、人前に立つのが好きになった。しかし、ただ一つ、高校生となった今でも吃音と向き合わなければならぬ時間がある。それが音読の時間だ。日常会話や人前での発表は問題ないのだが、国語の音読の時間だけはどうしても極度の緊張感に苛まれ、吃音が出てしまうことがある。

こんな私にも夢がある。それは教師になることだ。私の人生を変えてくれた先生のような教師になり、自分も誰かの人生を変えたい。私が幼少期に出会ってきた先生たちがしていた教育は少し間違っていると思う。その子の言いたいことを聞かず、ただ頭ごなしに叱る。そんな教育では、子供は自分に自信が持てなくなり、内気な人間になってしまふと思う。自分が教師になって、子供がのびのびと成長できるような教育をしたい。吃音を経験してきた私だからできる教育があると思う。

私のように、悩みや病気、障害を抱えながらも、克服したり、うまく付き合ったりしながら生活している人が世の中にはたくさんいる。そういう人は、自分ができることが限られ、不幸だと感じることがあると思う。しかし私は、そういう苦悩を経験してきた人には、その人にしかできないことが必ずあると思う。そのうちの一つが、経験やアドバイス伝えることだと思ふ。世界には自分と同じようなことで悩んでいる人が必ずいる。そんな人に話をしてあげること、その人が救われる。そうすることが自分の生きる意味になると思う。自分のために生きる意味になると思う。自分のために生きるのは当然のことだが、自分が生きて、それが誰かのためになるということは本当に幸せなことだと、私は考へる。